

「武家伝奏と禁裏小番——中世・近世との比較から——」趣旨説明

朝 幕 研 究 会

本日（二〇一二年九月十五日）は残暑厳しき折柄、このように多数の方にお集まりいただき、誠にありがとうございます。今回の第5回近世の天皇・朝廷研究大会はシンポジウムの企画を立てました。明日は自由論題研究報告が同じこの会場（学習院大学北2号館10階大会議室）で開催されます。シンポジウムの企画は、過去に第2回「近世朝廷の女性たち」と第3回「近世の天皇・親王・公家の家職」のテーマを立てて行いました。第2回では、近世における天皇家の女性と、女院、女官の実態を明らかにするとともに、女性史・家族史の論点にも迫ろうとしました。第3回では、家職論を切り口にして、近世の天皇・朝廷の性格を検討しました。まず、天皇の存在を家職論として分析し、つぎに、土御門家を中心に公家の家職を、さらに有栖川宮家の書道の家職と青蓮院宮門跡の書道の家職を対比的に捉えました。

今回は、「武家伝奏と禁裏小番——中世・近世との比較から——」

のタイトルを立て、室町幕府と朝廷の関係、江戸幕府と朝廷の関係について検討し、両時代の違いを探ってそれぞれの特徴を説明しようとするものです。換言すれば、中世・近世権力構造の比較研究ということになります。しかし、やみくもに大きな課題の比較研究を行えるのではなく、武家伝奏・禁裏小番や武家昵近衆にスポットを当てて、それらが果たした役割や関係を実態的に描く中で、室町幕府と江戸幕府のそれぞれの権力の個性や特質を追求しようとするものです。天皇の存在は、室町・江戸期に限らず、常に時の政治権力と関係を持ち続けており、現在進行形の問題といえます。今回のシンポジウムを通して、日本歴史上の政治権力と天皇との位置関係を解明する大きな課題に接近できるように、報告に続く討論での議論が深まることを期待して、趣旨説明を終わらせていただきます。

（文責 高埜利彦）